

芦屋室内合奏団 第41回定期演奏会

Ashiya Chamber Orchestra The 41st Regular Concert



Henri Matisse

兵庫県立芸術文化センター 小ホール

Hyogo Performing Art Center, Recital Hall

2007年 12月 28日(金)

28 December, 2007 (FRI)

開場 18:00 開演 18:30

Open 18:00 Start 18:30

昭和40年、芦屋市浜町の橋本邸で発足した当団も本日で41回目の定期演奏会を迎えました。

今回は、会場予約の関係で例年になく年の瀬も押し迫った平日の夕刻となりましたが、あわただしい中にもくつろいだひとときを過ごしていただければと存じます。

本日は、新進ピアニストの紹介に加えて、前回の定期演奏会に米国から来日され自作を指揮して頂いたD. L. アパート教授が来日時の印象を綴り、当団の為に今年8月に発表された新作を世界初演致します。永年に亘り、相変わらず当団を暖かく見守って下さいますご来場の皆様方に、厚くお礼申し上げます。

2007年 12月 芦屋室内合奏団 団長 青柳 良、団員一同

日本の皆様、弦楽合奏のための新作の初演をお聴きください。作曲ノートに記しましたように、この作品は非常に優れた奏者のグループである芦屋室内合奏団とのお付き合いからインスピレーションを受けました。今年1月、第40回定期演奏会で自作「エレジー」を最高の演奏の中で指揮できたことは私の経歴の中で最も大きな出来事のひとつでした。彼らは私の音楽を高く評価し新作を要望して下さい、またお聴きになった皆様には暖かく受けとめて頂きましたことから、「奈良変奏曲」という素敵な音楽が生まれました。長く中断していたあとの作曲はエキサイティングでした。この作品は私の今までのもので最高の音楽であろうと思っております。初演のようを聴くのがとても待ち遠しく、演奏会当日は出席できませんが心は皆様と共にあります。

D. L. アパート (Donald L. Appert, DMA)

プログラム

A. コレルリ 合奏協奏曲 作品6-8 「クリスマス協奏曲」

J. S. バッハ ピアノ協奏曲 第1番
独奏 渡邊 さらさ



D. L. アパート 「奈良変奏曲 (Nara Variations)」

J. スーク 弦楽のためのセレナード

指揮 酒井 睦雄

■ A. コレルリ 合奏協奏曲 作品6-8 「クリスマス協奏曲」ト短調

アルカンジェロ・コレルリ(1653-1713)は、イタリアの作曲家・ヴァイオリン奏者。ボローニャで学び、ローマで活躍した。作品はジャンル、数ともに限られており、トリオ・ソナタ 48 曲、ヴァイオリン・ソナタ 12 曲、合奏協奏曲(コンチェルト・グロッソ) 12 曲がすべてであるが、いずれも推敲を重ねた珠玉のような作品である。

合奏協奏曲はコレルリが創始した形式で、編成は 2 台のヴァイオリンとチェロおよび弦楽合奏による。全 12 曲のうちこの第8番は「クリスマス協奏曲」の名で特に親しまれている。「キリスト降誕の夜のために」と副題があり、これはト長調の追加楽章「パストラーレ(田園曲)」に由来している。イエスが厩で誕生したという天使の知らせを聞いて羊飼いたちが真っ先に集まってくるのどかで敬虔な田園の情景がここで描かれている。

I. ヴィヴァーチェ、グラーヴェ

II. アレグロ

III. アダージョ、アレグロ、アダージョ

IV. ヴィヴァーチェ

V. アレグロ

VI. ラルゴ パストラーレ

ヴァイオリン独奏 : 第1Vn 鳥丸 安雄、第2Vn 三村 誠子

チェロ独奏 : 鳥丸 直子

■ J. S. バッハ ピアノ協奏曲 第1番 ニ短調

ヨハン・セバスティアン・バッハ(1685-1750)のチェンバロ協奏曲は、1台のチェンバロによるもの7曲、2台によるもの3曲、3台が2曲、4台が1曲あるが、どれもオリジナルはヴァイオリン協奏曲、オーボエ協奏曲などであったものを編曲する形で成立している(4台のチェンバロによる協奏曲はヴィヴァルディの4つのヴァイオリンによる協奏曲が原曲)。チェンバロ、クラヴィーア独奏のために多様な作品を残した一方で、意外な点である。

そうした経緯であるが、500曲もの協奏曲を残したヴィヴァルディがチェンバロ協奏曲を書いていない一方で、バッハはチェンバロの個性と技巧を発展させ、この楽器を通奏低音の役割から一躍コンチェルトの独奏楽器とし、バッハの息子たち、さらにモーツァルトのピアノ協奏曲への先導となったのである。

第1番は原曲がヴァイオリン協奏曲である。スケールが大きく堅固な構成に、ロマンティシズムを濃厚に湛えており、バッハのチェンバロ協奏曲の中で最も重要な作品であるとみなされている。第1楽章冒頭、厳しいリズムをもったユニゾンにより起伏に富んだ旋律が示され、独奏と合奏が緊張感を持続しながら情熱を高めてゆく。分散和音のシンプルな弦楽の音形に独奏が装飾音を使った典雅な旋律を織り成してゆく第2楽章、エネルギーに溢れ変化に富んだ第3楽章からなる。

I. アレグロ

II. アダージョ

III. アレグロ

■ D. L. アパート 「奈良変奏曲 (Nara Variations)」

ドナルド・L・アパート(1953-)は、現在米国ワシントン州クラーク・カレッジの音楽学部主任教授、同カレッジオーケストラの音楽監督、オレゴン州オレゴン・シンフォニエッタオーケストラ音楽監督を務めている。当団コンサートマスターと親交があり、氏の作品「夢のように(In the Similitude of a Dream)」、「ガラスごしの翳(Thru a Glass Darkly)」をそれぞれ1998年、99年に日本初演、当団のために書かれた「弦楽のためのエレジー」を2001年11月神戸にて世界初演を行なっている。2005年の「弦楽のためのエレジー」に続き、2006年「プリズム(Prism)」でも ASCAPLUS Award (全米作曲家賞)を受賞するなど、氏の作品は高い評価を受けている。

「奈良変奏曲」も当団のために書かれ、本日世界初演である。氏による詳細な作曲ノートから一部を引用しよう《芦屋室内合奏団第40回定期演奏会で私の作品「エレジー」を指揮した翌日、我々は奈良観光で過ごしました。午前7時、出発しようとした時、私の頭にある音楽が浮かびました。手拍子のあと「オウ！」と叫ぶ日本古来のセレモニーでの三本締めで触発されたのです。私は前日の演奏会の打ち上げでそれを初めて聴いたのでした。五線紙が手元になかったのでホテルにあったメモパッドに、頭に浮かんだリズムといくつかのメロディーのモチーフを書き留めました・・・》さらにノートによると、奈良散策の調べがヴィオラで演奏され、氏が数年蓄えてきた様々な要素をミクソリディアン(教会旋法的一种)、ジャズ、ロック、ドビュッシー風上昇コード、一拍遅れで次のパートが入る「ミラー効果」といったアイデアで盛込んでいることが判る。出来上がった音楽を通して、日本のどこかから発散している、私たちには捉えられない異次元のパワーを体験できるのではないだろうか。

■ J. スーク 弦楽のためのセレナード 作品6 変ホ長調

ヨセフ・スーク(1874-1935)は、チェコのヴァイオリン奏者、作曲家。11歳でプラハ音楽院に入学を許された早熟の才能の持ち主だった。音楽院で後にドヴォルジャークに就いて作曲を学び、同じ門下で交響詩などを残した70年生まれ、ヴィーチェスラフ・ノヴァークと親交を結んだ。演奏家としては、チェコ弦楽四重奏団の第2ヴァイオリン奏者として40年あまり活躍している。現代の名ヴァイオリニストのヨセフ・スークは孫にあたる。

スークはドヴォルジャークの厚遇を得て、その愛娘オルティカと知り、後に結婚することになる。弦楽セレナードはスーク18歳の年に作曲されており、知り合ったばかりの14歳のオルティカへの思慕を籠めて書かれたといわれている。美しい旋律、色彩的なハーモニーが豊かで師ドヴォルジャークの弦楽セレナードと並んでスークの代表作となっている。才気溢れる内容で、細部に亘って複雑なリズムや転調が多用されていて演奏するのはなかなか難しい曲である。アダージョ楽章では独奏チェロが歌い、スラブ色も表現されている。

I. アンダンテ・コン・モート

II. アレグロ・マ・ノン・トロポ・エ・グラツィオーソ

III. アダージョ

IV. アレグロ・ジョコーソ、マ・ノン・トロポ・プレスト

R.O.

■酒井睦雄 Mutsuo Sakai 指揮、音楽監督

桐朋学園高等学校音楽科を経て1971年桐朋学園大学卒業。指揮を斎藤秀雄、秋山和慶両氏に、クラリネットを北爪利世、二宮和子、F. フックス各氏に師事。71年より相愛オーケストラ指揮者、77年ザルトブルクにてO. スイトナー氏に師事。同年、東京にてS. チェリビダック氏のゼミナールに参加。2001年には芦屋室内合奏団を率いてドイツのバンベルクにてバンベルク交響楽団団員とともにニューイヤーコンサート、ドレスデンにてフラウエン教会落成記念コンサート等を行い好評を博す。2005年 第19回京都芸術祭音楽部門 京都府知事賞受賞。現在、相愛大学教授として音楽専門家の育成にあたる傍ら、74年より芦屋室内合奏団音楽監督、岐阜交響楽団常任指揮者、90年より高知室内管弦楽団指揮者をつとめる等、アマチュア合奏団の発展にも尽力している。

■渡邊さらさ Sarasa Watanabe ピアノ

国立音楽大学附属中学校から高校、大学を経て、2001年同大学大学院を修了。大学卒業演奏会、大学院新人演奏会、カザルスホール、サントリー小ホールにて日唄文化協会開催のコンサートに出演。国立音楽大学奨学金、国内外研修奨学金を受賞。大学院の修了演奏にバルトーク作品をとりあげその作品研究が認められ、2001年全日本ピアノ指導者協会(PTNA)の研究論文に採用される。

2002年からハンガリーに渡り、リスト音楽院に留学。2003年からハンガリー政府給費奨学生となる。リスト音楽院にてリサイタル等を行う他、ザイラーピアノコンペティション(ギリシャ)、サンレモピアノコンペティション(イタリア)等でディプロマ賞を受賞するなどして研鑽を積み、2005年帰国。

2006年銀座王子ホールでソロリサイタル、2007年表参道カワイバウゼにてジョイントリサイタルを開催するなどソリストとして活動する他、室内楽やインタラクティブコンピュータ作品演奏に取り組む等して、コンサートを行っている。

ピアノを藤本禮子、古代公子、米持隆之、故田中希代子、岡山京子、今井顕、ナードル・ジョルジュ、レーティエ・バラージュの各氏に、室内楽を徳永二男氏に師事。

2006年より中京短期大学ピアノ講師。

■芦屋室内合奏団

ヴァイオリン	:	鳥丸安雄 (コンサートマスター)	藤本恭子	福永千江子
		伊藤耕平	勝部 操	吉岡道子
		青柳 良	田島光子	喜多智佐子
ヴィオラ	:	福永精一	音村圭一郎	伊藤恵子
				中田久仁子
チェロ	:	鳥丸直子	宮崎晴夫	堀田一之
コントラバス	:	赤松里美 (客演)		
チェンバロ	:	小津久子		

当合奏団は1965年、当時の神戸大学、甲南大学の学生オケの首席奏者と初代指揮者 中島良能(現湘南エールアンサンブル音楽監督、ルーマニア国立ボトシャニフィル首席客演指揮者)等が芦屋市の故橋本宗夫氏宅に集まり、スタートした。1974年からは現相愛大学 酒井睦雄教授の指導を受け、2001年にはドイツ公演でバンベルク交響楽団員とニューイヤーコンサートを行った。これまでに宮本政雄、毛利伯朗、延原武春、斎藤達男、鈴木雅明、各氏にご共演いただく。40年に亘る演奏活動で取り上げた作品は、バッハ、ヘンデル、ヴィヴァルディをはじめとするバロック音楽、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンからロマン派、現代音楽まで多数にのぼる。木管楽器、金管楽器奏者、また歌手の方々との共演も積極的に行ってきた。

毎月2回、日曜日、練習場に各々愛器を提げて集まり、練習時間は真剣そのもの、休憩時間はお茶とお菓子に話が弾む。毎年秋には合宿。音楽をとことん楽しむ団員ぞろいの合奏団である。